

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者発表（敬称略）

※受賞者・作品名をクリックすると作品に移動します

【文部科学大臣賞】

神奈川県立
横浜平沼高等学校

平井歩佳 ひらい あゆか
（体験書籍『車夫』『車夫2 幸せのかっぱ』『車夫3 雨晴れ』
いとつみく 小峰書店）
読めない本

【全国高等学校長協会賞】

千葉県 筑波大学附属
聴覚特別支援学校

福永心雪 ふぐなが こゆき
（体験書籍『最初に夜を手ばなした』椿冬華 マガジンハウス）
前を見て躓く、それでも

【全国高等学校長協会賞】

静岡県立掛川東高等学校

佐野夢果 さの ゆめか
（体験書籍『ハンチバック』市川沙央 文藝春秋）
ハンチバックの私達

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

福島県立喜多方高等学校

佐竹華凜 さたけ かりん
（体験書籍『大量廃棄社会 アパレルとコンビニの不都合な真実』
仲村和代 藤田さつき 光文社）
お洋服が転生したら猫を救った件

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

三重県 鈴鹿工業
高等専門学校

南心結 みなみ こづゆ
（体験書籍『君のクイズ』小川哲 朝日新聞出版）
私のクイズ

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

奈良県立青翔高等学校

小林慶悟 こばやし けいご
（体験書籍『ダーウィンと進化論 その生涯と思想をたどる』
Kristian Lawson 訳／大森充香 丸善）
進化の過去と未来を探る

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

山口県 宇部工業
高等専門学校

杉山桐唯 すぎやま ときい
（体験書籍『52ヘルツのクジラたち』町田そのこ 中央公論新社）
それでも、聴き続ける

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

大分県立芸術緑丘高等学校

又吉琉那 またよしる な
（体験書籍『納棺夫日記 増補改訂版』青木新門 文藝春秋）
外見だけが美しさじゃない

「全国高校生読書体験記コンクール」について

このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社のご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」ともに実施している事業です。多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのような行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

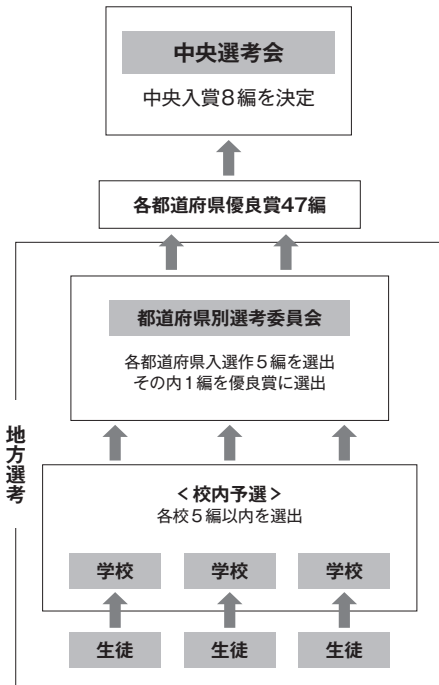
第43回の本年度は、全国47都道府県から381校の参加があり、応募作品は64,422編となりました。

【選考】

- ◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。
- ◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考会に送られました。

- ◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

【作品の応募と選考の流れ】



【賞】**中央入賞 8名**

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
- ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
- ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品

*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

*優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 182名 賞状・記念品

*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央選考委員(敬称略)】

- 辻原 登 (作家)
- 穂村 弘 (歌人)
- 角田光代 (作家)
- 宮崎活志 (文部科学省初等中等教育局主任視学官)
- 林 達也 (全国高等学校長協会)

【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

【文部科学大臣賞】

読めない本

私には読めない本がある。正確に言うところ「読み返すことをためらう本」がある。いろいろみる著の『車夫』だ。

この本に出会ったのは私が小学四年生のときだった。十二月の下旬、大好きだった母が父と大喧嘩の末、突然家を出ていってしまった。両親は時々喧嘩をすることはあったが、そのときの喧嘩はそれまでで一番大きかったことは覚えている。小さかった私には内容は分からなかったが、まあいつものことだろうとたいして気にも留めていなかった。けれど、今まで当たり前

に存在が突然いなくなった衝撃は、十歳だった私にとってとても大きくかった。

生活の変化に追いつけずいた私は自然と居場所を求めようと図書館に通い、本の世界に入り浸っていった。そんなとき、あらすじを読んだわけでも車夫の仕事に興味があったわけでもなかったが、なぜだか引きつけられるようにして『車夫』を手にとった。個性豊かな登場人物達や一章ごとに異なる展開がなされるのももちろん面白かったが、何より私は主人公の「走」に惹かれた。走の境遇は事業に失敗した父に

ついで母が失踪し、生きていくために高校を中退して陸上部のOBの誘いで車夫を始めるというものだった。私は夢中になって読んだ。当時、担任の先生や友達が私のことを気にかけてくれたが、どこか悲壮さがぬぐえずこり固まっていた私の心にこの本は深く響いた。

明るく取り繕うわけでもなく自分のペースで前を向き、自分の道を行く走は私にとって道導のような存在だった。自分と同じような境遇の人が先を走っている。本の中の人物だけれども、大丈夫と何が大丈夫か

神奈川県立横浜平沼高等学校 二年

平井歩佳

分からず声かけられるよりもその背中が私にとって唯一の救いだった。私は孤独感、悲痛、心苦しき、言葉で言い尽くせないが感じがらめになった感情を全て本に注ぎこんだ。

私は今でも不安になったとき、母のことを思い出すとき、走のことを思い浮かべる。しかし本を手にとることができない。私は抱えきれない心の葛藤を本に挟んでしまひこんだ。だから未だに乗り越えられていない自分が本を開くと、十歳の頃の感情があふれてしまひそうで、その感情に囚とらわれてしまひそうで怖くて読めない。

月日がたつて、私は走と同じ年になった。あれから七年近く、母とは面会も交流もしていない。どうしているのか、私のことをどう思っているのかも分からない。けれど、もし会ったらと想像してみる。走は作中で母親が会うことを望んでいると告げられる場面があった。けれども多くの葛藤の後、自分の新しい居場所を選び、会うことを断わった。私はどうだろう。七年間、会ったときのことを何度も考えた。どんな思いを私がしてきたか、と母の頬を引っ叩たたきたいと思う日もあれば、めいっばい抱きしめて

ほしいと思う日もあった。母への態度は定まらないが、どちらをするにせよやっぱり一度は会いたいと思う。そして、そんな考えを巡らせる中で、母と過ごした日数を母と離れた日数が追いつくかそう少しかくもなる。

大学受験が迫る中、将来のことについて真剣に考えることも増えた。その中でアイデンティティについて考えたとまたしても母のことを考える。母はあまり感情が表に出づらいつつだったが一緒に遊んでくれ、病気がちだった私のことを誰よりも心配してくれた。そして、聴覚障がい者でもあった。

母の側でたくさん物の触れ、感じた今、私は福祉の道を進もうと思っている。母の面影を追っているだけなのかもしれない。乗り越えられずに引きずっているだけかもしれないと自嘲する気にもなる。けれど手話の講座に通ったりボランティアに参加してみても感じた実感でもある。私はこの道を歩みたい、と。走のようにまっすぐ前を向けているか分からないけれど、自分の目指す道を進んでいきたい。

今の私に『車夫』は「読めない本」だが「読みたい本」でもある。一見矛盾してい

るが、当時の私を、そして今の私を支え立たせてくれているかけがえのない大切な本だからじっくり読み返したい。いつになるかは分からないが、いつか十歳の私と向き合うことができたとき、心に温もりを感じながら読み返したい。

体験書籍

『車夫』車夫2 幸せのかっぱ 『車夫3 雨晴れ』
いとうみく 小峰書店

【全国高等学校長協会賞】

前を見て躓く、それでも

千葉県 筑波大学附属聴覚特別支援学校 三年

福永心雪

昔、私はよく母に「前を見て歩きなさい」と叱られていた。常日頃、何かにぶつかったり、躓いたりしていたからだ。しかし、私はどうしても母のその言葉に納得できなかった。言われた通りにしているのに、なかなか改善できない私は「前を見ればぶつからないのなら、何故私はこんなにつつかってばかりなんだ」と、いつも心の中でふてくされていた。時には私が自覚している「前」さえ疑い出し、もうどこを見たい時期もあった。勿論、それでは逆にぶつ

かりやすくなってしまうので、結局前を見るスタイルに戻ったが、ずっと心は晴れないままで小学生時代を過ごしていた。しかし、中学生の時に眼科で受けた診断によって私達の認識は大きく変わった。

「網膜色素変性症」

それが私の診断結果だった。母によれば徐々に視野が狭くなっていく目の病気だという。他にも夜盲や羞明など進行するにつれて目が見えづらくなる難病。その進行は個人差が大きく、徐々に進行して失明することもあれば、一生良好な視力を保つこと

もあるらしい。また、その病気の人は視野狭窄きょうさくによってぶつかりやすくなる特性が見受けられるそうだ。

それを知った時、前を見ることへの主張のぶつかり合いはどちらか一方がおかしいことを言っているのではなく、私も母もそれぞれ正しかったのだと気づいた。これを機に、母から「前を見て歩きなさい」とは言われなくなり、私も注意したところではぶつかるのならそれはそれで仕方ないと割り切って受け入れられるようになった。結果的に難病の診断結果はそれまでの悩みを解

【全国高等学校長協会賞】

ハンチバックの私達

静岡県立掛川東高等学校 二年

佐野夢果

そのニュースを知った時、身体中の臓器を全て体内から取り出されたような。そんな感覚だった。そして読了した今。一度取り出された臓器は、膨大な何かを詰め込まれ、私の体内に戻ってきた。その臓器から送り出される血液はあまりに速く、身体が張り裂けそうな感覚に陥った。「重度障害者の市川沙央さん、芥川賞受賞」。このニュースを知った瞬間全身の震えが止まらなかった。思えば私は、この瞬間から何か運命的なものを感じていたのかもしれない。そしてこの本を読まなければ、そう強く思った。

私もこの本の著者である市川さん、そして主人公である釈華と同じく、重度障害者だ。そして私の解釈が間違っていないければおそらく私も「せむし」である。当事者という言葉に該当するであろう私にとっても、著者が紡ぐ当事者性はあまりに衝撃的なものだった。それと同時に、私は当事者でありながら、著者が作中物語を通して糾弾する一人なのだということを、物語の冒頭から突きつけられた。きっと私は潜在的意識の中で思っていたのだろう。当事者性やリアルを描きつつも、前向きに清く明るく健

気な、無理だと分かりきっていることは最初から望まない。そんな女性重度障害者が、この本の中では描かれているのだろうと。だからページを開き、作中の言葉に触れた瞬間、鈍器で頭を殴られたみたいな衝撃だった。そして私が一生懸命築き、自身を守るために使ってきた障害者像を、その瞬間引き剥がされた気がした。社会から求められる障害者像や同情をも寄せ付けない、力強さがこの本にはあったのだ。私は多分いつも考えていた。自分の立ち位置や周りから求められているものを。当事者や障害者

として括られることを嫌がりながら、自分が一番当事者、そして障害者であるということを意識していたのだろう。思えば昔から私には障害がいつも付き纏っていたように思う。賞を取れば、

「障害があるのにすごいね」

と称賛され、車椅子に乗って一歩外に出れば、

「可哀想に」

と同情的な言葉を投げかけられることも少なくなかった。幼い私はそんな言葉を受け取るたびにモヤモヤし、悩んでいたように思う。私自身ではなく、障害者である私が評価されることや、悲劇のヒロイン的立ち位置に自分が位置付けられることに、違和感を感じ、いつしかその違和感は強烈な嫌悪感に変わった。しかしそんな言葉を投げかけてくる人達には悪意がないことも、自分自身痛い程分かっていた。だから次第にぶつけ先がないこの想いに、押し潰されそうになり、ある時抱えきれなくなつたのだと今は思う。そして私は受け入れた。本質的に受け入れたのかは分からないが、フリだとしても受け入れると楽だった。可哀想な障害者の女の子がひたむきに頑張る前

向きな姿がみんな好きだったし、もちろん前向きではない私を受け入れてくれる人もいただろうけど。そんな私を出すのには、あまりに勇気が必要だったから。だからいつしか自然と、苦しくても楽な方を自分から選んでいた。

「障害があるのに頑張っていて勇気づけられました」

みたいな言葉をもらうたびに、一番憎く「せむし」で「怪物」な自分が生きていい気がしたからだ。この本の主人公である積華がもつ自己否定的な部分や世間からの疎外感、100%ではないかもしれないが、あまりに自分と重なり、読んでいて心臓が握り潰されるみたいだった。そしてこの積華や私の中で蠢く感情は外に出たとしても、どうにも周りからは理解されない、理解しようもない感情だという現実を突きつけられてしまう。そしてどんな言葉をかけられても、ルサンチマン的な感情を抱いてしまふ鏡に映る私が嫌で、鏡に映るハンチバックの怪物がどうしても憎いのだ。しかし積華がいうように、汚い泥がなければ私達は生きていけない。それを吐き出すことは私には出来ないが。だから前向きできれいな

ものとはまた別の、ぐちゃぐちゃしたものが、『ハンチバック』という形で世間に存在することが私はとてつもなく恐ろしくそして嬉しいのかもしれない。

障害者に限らず、様々な事柄に縛り付けられ、生きづらさを抱えている人は社会に一定数いるのではないだろうか。きつとそんな人達は、強烈な恐怖と共にこの本に救われるかもしれない。この本を読んで欲しくないという感情と共に、淡い期待を抱かずにいられない。この本が社会全体に広まり、括られない社会になることを。生きづらさを抱える人に届くことを。

体験書籍
『ハンチバック』市川沙秋 文藝春秋

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

お洋服が転生したら猫を救った件

福島県立喜多方高等学校 一年

佐竹華凜

『大量廃棄社会』は、朝日新聞の二人の記者によって書かれたノンフィクションで、消費者の手に渡ることのないまま廃棄される大量の衣料品と食品について書かれた本である。食品ロスの認知度は高いが、衣料品ロスに関してはこれまで耳馴染みが無かった。しかし本書を読んで、その実態に驚愕した。

年間およそ十億枚もの衣類が、消費者の手に渡らず新品のまま廃棄されているという。これは供給量の四分の一に当たる。なぜこれほどまでに多くの衣類が未使用のま

ま廃棄されるのか。大きな要因は、九〇年代と比較して、消費量がほとんど変化していないのに対し、供給量は倍以上に増加したことにある。アパレルメーカーが、世界規模で分業体制を進め、大量生産による大幅な価格引き下げを実現してきた。安くて大量の衣類が店頭に並ぶことは、一見すると経済が豊かになっているように見える。しかし、倍増した供給量を、人口も所得も増えていない現在の日本社会においては消費することができず、廃棄されることになっているのである。

衣類の廃棄は単に「廃棄される服がもつたいない」という話で済ますことのできない、深刻な側面を有する。衣類の生産過程において、大量に水や農薬、化学薬品を使用するため環境への負荷が大きく、農薬や薬品を扱う労働者の健康被害も懸念されている。また、縫製を受注している国の多くは、経済発展の途上にあり、労働者が生活のために低賃金長時間労働を強いられている。本書から最も衝撃を受けたのは、二〇一三年に起きたバングラデシュの「ラナプラザ」の崩壊事故についてだ。八階建て縫製

工場のビルの柱が折れ、原形を留めずに崩れ落ち千人以上が犠牲となった。原因は、違法に増築を繰り返し建物に亀裂が入っていたためだという。バングラデシユでは、安い人件費を売りに、国をあげて先進国向けの服作りを受注してきた。加速する経済成長に追い付かず、蔑ろにされた安全管理。私たちの暮らす先進国で、安く品質も良い服が手に入るその裏で、最低限の安全すら保障されない環境で働く人たちがいたことを知った。

環境と労働者に大きな負担を掛けているにもかかわらず、アパレル企業が大量の服を発注するのは、同じロットで大量に作る方がコストを抑えることができるからだ。廃棄に係る費用を差し引いても利益は得られる。こうして「大量廃棄社会」の現状が形成された。

大量生産・大量消費・大量廃棄の社会は、豊かであるとは言えない。地球環境と途上国の労働者双方に大きな負荷を掛けているのだから。企業は利益の追求だけでなく、地球や人に優しい経営の在り方を探る必要がある、私たち消費者は廃棄の現状を認識し、衣類の消費の仕方を再考する必要がある。

このような社会問題に対して、個人にできることは何か。私は洋服が好きだ。可愛い洋服を着ていると心地よく、楽しい一日が過ごせるような気がする。その一方で洋服が新品のまま大量に棄てられる現状がある。社会全体の認識やアパレル企業の経営スタイルが変わらなければ改善することは難しいだろう。私一人にできることは何も無いように思えた。

しかしある休日、月に一度開かれる地元朝市「マルシェ」を訪れた際、「そうだ！新品のまま棄てられる服をここで売るのはどうだろう」と思った。この朝市はフリーマーケットで、地元の個人や商店が、野菜から雑貨まで様々な物を販売している。そこで洋服を販売し、来てくれた人たちに衣料品ロスについて伝えようと考えた。洋服は人の手に渡り、廃棄問題の認知度が高まることで、少しずつ社会が変わるかもしれないとの期待を込める。そこで母にお店の手続きをしてもらい、自分の預金で洋服の仕入れを行った。洋服は衣類の廃棄問題に取り組んでいる業者から買うことができ。同世代に人気のブランドの洋服も新品かつ値札の付いたまま綺麗な状態で、一着

数百円から仕入れることができた。それらを九百円均一、冬のアウターは三千円程で販売することにした。

朝市当日は、大勢が立ち寄ってくれた。一人ひとりに、膨大な衣類の廃棄が問題になっていることを説明すると、驚きと共に理解を示してくれた。「新品で棄てられるなんてもったいない」「そんな実態があるとは知らなかった」との言葉が聞かれた。販売は盛況でほとんどの服が廃棄されずに済んだ。洋服が本来の役目を果たせることの嬉しさと、廃棄について伝えられた達成感が私の中であふれた。販売利益は、県の動物愛護センターに寄付した。保護猫を三匹育てている私は、動物の殺処分も無くしたいと思っているからだ。

社会問題に対して、個人にできることは小さいかもしれない。だが、この一冊の本が、私の行動力をかき立て、小さな一歩を踏み出させた。世界を変えるには、「知る」ことが大切だと感じた。

体験書籍

『大量廃棄社会』

アパレルとコンビニの不都合な真実

仲村和代 藤田さつき 光文社

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

私のクイズ

「クイズとは人生である」

その通りだと思う。この作品では、それぞれの人物が過去に見聞きした経験がクイズの正解へと導いているが、私はまだ、経験不足からその逆が多い。そして、この本を読んでからは、クイズに人生を導かれている。

この本の中にはクイズプレイヤーの日常が詰まっている。そして、「クイズは魔法ではない」ことをしっかりと説明してくれている。私も主人公の対戦相手である絆と同じく、「ゼロ文字押し」をしたことがある。

過去の傾向を分析し、一問目でこの問題がくるのではないだろうかと予測したからだ。そして、それは一見ギャンブルのように思われるかもしれないが、絆と同じく、実はかなりの確率で確信があって押している。私は競技クイズの経験はない。だが、クイズは好きだ。高校選択の時、クイズ研究部のある学校へ進学しようかと真剣に悩んだことがある。だが、コロナ禍だったこともあり断念した。競技クイズをやるならば、やはり同じ場所で緊迫した空気の中、早押しボタンを押すのが醍醐味だろうと考えて

いたからだ。そうして、気が向いた時にだけゲームアプリで気楽にポチポチとクイズを楽しむ日々を送っていた。だが、体験入部の時に押した早押しボタンの感触と、正解のピンポンの音が心地よく胸に響く感覚を忘れられずにいた。

そんなある日、とあるアーケードゲームに出会った。早押しボタンを実際に押せる筐体クイズゲーム機だ。しかも、シーズンごとの全国ランキングで上位になると、テレビでよく見る有名なクイズプレイヤーたちと実際にリアルタイムでオンライン早押し

三重県 鈴鹿工業高等専門学校 三年

南心結

しクイズが対戦できるといふ。私は思わず飛び付いた。

だが、現実には甘くなく、知識不足でなかなかボタンが押せない。答えがわかっても押し負けてしまう。当然だ。今までクイズに一切努力をしていないのだから。クイズ歴が何十年もある競技クイズ出身者たちがウジャウジャいる中で、私は溺れかけていた。正解音が恋しくなり、まずはクイズを知ろうと思った。そんな時に出会ったのがこの本だ。この本の中には、クイズのテクニクが言語化して詰め込まれていた。だから読む前と読んだ後では、クイズの見方が全く違うものになった。はじめはそうだったのかと驚くことばかりだったが、今から思うとあるあるばかりだ。

思わず笑ってしまったのは、日本で一番低い山のくだりだ。私は小さい頃、祖父母に会いに行く高速道路の天保山付近で、日本一低い山は天保山だと教えてもらっていた。だから私はクイズに出た時に自信をもって「天保山」と答えたが、不正解だった。主人公と同じで、東日本大震災による地盤沈下で日和山が一番低い山に変わったことを知らなかったのだ。「クイズは生きてい

る」を実感していた。今まで正解だとされてきたことが、今は間違いとされることもある。それは人生も同じだ。だから何事も決めつけることなく、自分でよく調べ、冷静に判断し、常に柔軟にアップデートし続けなければいけないと思った。

それでも、初心者の私は他のクイズプレイヤーに手も足も出さず、何度も挫けかけた。心が折れ、下を向いては、何度もボタンにしがみついた。その隙間に聞こえる正解のピンポンの音が私をなだめ、励まし、肯定してくれた。だから主人公の気持ちがよくわかった。

私を肯定してくれたのは正解音だけではなかった。続けるうちにSNSで繋がったゲーム仲間だ。「あの一問すごく早かったよ」と、数少ない正解にもコメントをくれ、間違えても「今の攻めは悪くないよ」とフォローをしてくれた。そう、この本の通り、強い相手には確定ポイントまで待つては勝てないのだ。事前準備や予測はできて、瞬時の判断や度胸は実践で身に付けるしかなかった。こんな未熟な私を、優しくも容赦なく鍛えてくれた仲間がいてくれたから、私はクイズを続けられ、どんどんクイズを

好きになっていった。

何度も戦いを挑み、やっとの思いで有名クイズプレイヤーに勝った時には、人目も憚らず歓声を上げ、ガッツポーズをしていた。この本と仲間のおかげだ。早押しクイズは対戦相手がいないと成り立たないのだから。

そして今、私はクイズを食べている。クイズで正解できなかったムサカを食べ、チャイを飲む。パネトーネは用意できなかったので、少し似たシュトーレンを。サンテリアや桂花陳酒はまだ飲めないけれど、しっかりと覚えるために物理的に食べている。クイズに出てきた本を読み、クイズに出てきた映画を見る。休みの日にはクイズに出てきた場所へ行く。今の私はクイズがこれからの行動を決める動機になっている。クイズで出たところが授業で出るとモチベーションが上がる。気分までクイズに左右されている。経験を積もうとした結果、私はクイズを通り越した新しい楽しみを見つけてしまった。クイズが私の人生を作っているのだ。これが私のクイズだ。

体験書籍

『君のクイズ』小川哲 朝日新聞出版

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

進化の過去と未来を探る

奈良県立青翔高等学校 二年

小林慶悟

ミイデラゴミムシという虫をご存じだろうか。黒い背中に黄色く細い模様が目立つ甲虫で、畑作業をしているとよく見かける。庭仕事中にこの虫をスコップで払いのけようとしたところ、この虫は腹を持ち上げて何やら噴射した。この虫は生き物に一瞬で火傷を負わず高温ガスを噴射するが、自身の体内で化学反応を起こす際、一切ダメージを受けることがない。私はミイデラゴミムシについて図鑑やインターネットで調べて疑問を感じた。このような特別な体を、彼らはどのようにして手に入れたのだろうか。

生物は何億年という時をかけて進化した。原始の海で生まれた微生物が様々な変化を遂げ、海や陸や空へと適応していった。私が疑問に思ったのは、その「過程」だった。私は家で鶏を飼っている。スーパーマーケットで売っているタマゴではなく、薬局で買ってきた有精卵を温めて孵すのだ。その中にはひよこにならない卵もある。できるだけ孵化率を上げようと、私は大学や研究所の論文などを詳しく調べた。その資料に、ひよこの発生段階の写真やスケッチが載っていたが、その様子が他の生物の発生とよ

く似ていることに気がついた。最初は魚のような形で、次第に足の水かきが発達してきて一見カエルのようにも見えるようになる。最終的に羽が現れて鳥の姿に成長していく。まるで進化の過程を見ているかのようだ。もちろん、鶏の一生を何度も見届けてきた経験も、私の進化に対する興味を一層膨らませるものとなった。生物の進化が起ころには、一体何がトリガーとなり、何の働きによって進化は進んでいくのか。そんなことを考えていた時、図書館で目にしたのがこの本、『ダーウィンと進化論』

だった。進化論とはどのようなものなのか、進化論を提唱した生物学者ダーウィンはどのような人物だったのか、興味をそそられた私は、すぐにこの本を読み始めた。チャールズ・ダーウィンは太平洋の島々で未知の新生物の調査をするうちに、生物の進化について考えるようになった。当初は生物の採集にのみ明け暮れたダーウィンだったが、旅の途中で目にした大地震による地面の隆起や火山活動、何より自身で採取した生物の標本の調査から、進化を確信する。そして長年にわたる実験から得た科学的実証によって、進化が本当に起こることを証明したのだ。この本では、魚類、両生類、ハ虫類、鳥類、哺乳類の発生の様子が酷似していることにも言及している。鶏の卵が、温度と湿度の変化によって発生が始まり、進化の過程を繰り返すような成長の仕方を見せることを私は思い出した。この本では進化の根本的なカギを握る遺伝子については詳しく書かれていないが、その仕組みについては学校の生物の授業で理解していた。ダーウィンが行った進化の証明と、進化のために変化していく遺伝子、この二つが漸くつながった。

虫、動物や植物を見る度に私は、この生き物がどんな祖先を持っているのか、何がこの生き物を今の姿かたちにさせたのかを考えるようになった。そして今では、過去だけではなく未来の生物の姿についても想像するようになっていく。数十万、数百万年後、きっと地球は今と異なる環境になっているだろう。その時、今この世界にいる生物たちはどのような進化を遂げているのだろうか。それとも地球環境は変わらず生物たちも進化しないまま、太陽が消えるまで同じ姿を保つのだろうか。そして何より、私たちは進化するのだろうか。人間はこれまで環境に適応するのではなく、人が住みやすいように環境自体を改変してきたため、人間が進化することはないという見方もある。また、生活が便利になって人間が退化するという考えもある。すべての生物が進化の過程にあり、生物の進化が止まることはないとも言われている。進化についてはまだまだ謎が多く、現在も進化論自体が進化し続けているとされる。

私は生物学者として研究することを夢見ている。遺伝子学や発生学から進化の変遷を探っていったらと考えている。最近、大

学の遺伝子学の研究室で観察や実験を体験した。その体験プランに参加したのは、自分の将来を見据えて、今の日本の医療問題について考えた時、遺伝子の研究こそが癌をはじめとする病気や障害などの解決策になると思ったからだ。実験はマウスの胎児の脊椎にある神経とホルモンの分布を可視化するもので、その神経の発達が他の生物ではどう違うのかという講義も聴いた。DNAや遺伝子の異常が原因で生じる難病を克服するには遺伝子レベルの治療が必要になる。もちろん、人間の遺伝子に手を加えることには倫理的問題がある。だが、命を救える術を持ちながら目の前の患者を見放すのは、果たして正しいことだろうか。私はそうは思わない。私は遺伝子という側面から進化を研究することが、現在及び未来の世界をより良いものにするに確信している。

体験書籍

『ダーウィンと進化論』

その生涯と思想をたづね』Kristian Lawson

訳／大森充香 丸善

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

それでも、聴き続ける

私が中学生の時の実体験である。同級生の一人の女の子が男子二人組からいじめを受けていた。離れたところから彼女に聞こえる程度の音量で罵り、悪口をささやくもので、最初の頃は彼女も笑いながら反抗していたものだから、私は思春期特有のじやれあいだと感じていた。ところが、いじめが日に日にエスカレートし、彼女も次第に反抗しなくなつたので私は焦燥し、先生に相談した。結果的に先生の仲介の下、彼女たちは和解したようで、その後は彼女の笑顔が増えたように思う。しかし、どこか晴

れない表情もあつた。
『52ヘルツのクジラたち』には安易な善意を持った教師が主人公キナコを救おうとする場面がある。教師は自身の視覚に頼りきり、表面的なことのみを捉えた結果、キナコはさらに人間不信になつた。この教師と私を重ね合わせて今一度考えてみる。あの時の私の行動は思慮に欠けたものだったのかもしれない。あの時はいじめを解消できず、いいことをしたと浮ついてた。今はこう思う、「私の行動は最良のものだったのか」と。他人に対して自分ができること

とは一体何なのだろうか。
52ヘルツのクジラとは、通常よりも高い周波数を発するが故に仲間のクジラと意思疎通を図ることができず、「世界で一番孤独」と称されているクジラのことである。この物語は虐待などの凄惨な過去をもつキナコと、現在進行形で虐待を受けている少年52が新たな人生を見つける五日間を中心に展開していく。私はキナコと52の間に確かな信頼が生まれた場面を読んで、「他人に自分ができることは何か」という問いに對して持っていた考えが変わつた。

山口県 宇部工業高等専門学校 二年

杉山桐唯

52は人生に希望を抱けず感情すら消し去ろうとしていた。一人孤独に心で叫び続けても、誰にも声が届くことはなかった。そんな絶望的な状況下でキナコは「あんたの52ヘルツの声を聴くよ」と語りかける。そして不器用ながらも、粘り強くキナコなりに彼の52ヘルツの声を聴き続けた。この二人の心が最も近づいた瞬間以降、52は徐々に閉め切っていた心の扉を開いていく。

私はあのいじめの時、先生に相談はしたが、彼女には言葉の一つもかけなかった。52が救われた時のような、彼女が吐き出したかった喉の奥の言葉の塊を取り出せるような言葉を。彼女の行動や表情から、「きつと苦しいのだ」と彼女を分かったような気になっていた。「私が他人にできること」とは、彼女をいじめの被害から抜け出させることだと思っていた。しかしそれでは一歩及ばずだったのだと思う。キナコと52からすると、自分が他人にできることというのは「その人の内なる声を聴くこと」なのであろう。今では私もそう思う。不細工な言葉でいい、言葉ですらなくてもいい。手間は何であれ、相手が心の内で何を叫んでいるのかを、親身になってくみ取っていく

ことこそが重要なのであろう。彼女が求めていたのは「助けてほしい」という内なる言葉を誰かにつけることだったのではないか。心に秘めた思いを、感情を思いのまま爆発させ、纏めきれない叫びを受けとめてくれる人を密かに求めていたのではないか。それなしに事態そのものが解決してしまい、感情の消化不良が起きていたのではないだろうか。今ではそう振り返ると同時に、彼女に届くことはないと思っただけなのかも、懺悔ざんげしている。

さて、この本を読み終えた後の私は他人とうまく付き合えるようになったのだろうか？ 結論から言うと、人付き合いはまだまだに苦手である。むしろ他人との関係が複雑に感じられて、距離がつかめなくなった。相手はどんな言葉や行動を求めているのか、信用を得るにはどの程度自分を曝さらけ出せばよいのか。チャレンジしても失敗続きで一向に内なる声を聴くことができない。自分に度々嫌気がさす。

それでも、一つ確かなことがある。それは他人と関わっていくという気概を、この物語から受け取ったということだ。以前より他人に歩み寄りたいと強く思えるよう

になれたのは、この物語との出会いによってあの彼女と共鳴できなかった過去を振り返ることができたからだろう。私はこの苦い過去を見つめ、改めて、他人との繋がりに方に向き合っている。もしも「他者の気持ちは完全には分からない」と投げ出したならば、その先に一体何が残るだろうか。心を閉じて、自分にできるであろうことを一つまた一つと捨て去っていけば、いつか振り返った時にまた、数えきれないほどの後悔と罪の意識が溢れてしまうのではないかと。私はそれが何よりも恐ろしい。

私は、刻一刻と過ぎてゆく瞬間の中で他人のために私ができることを一つずつ全うしていきたい。そうすることで、キナコや52のように目の前の大切な人々に少しでも近づくことができると信じている。

体験書籍

『52ヘルツのクジラたち』町田そのこ

中央公論新社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

外見だけが美しさじゃない

大分県立芸術緑丘高等学校 一年

又吉琉那

「人は誰もが、死ぬときは美しく死にたい
と
思っている。しかし美しく死ぬとはどの
よ
うな
こ
と
な
の
か
、
は
っ
き
り
し
な
い」。私は、
こ
の
一
文
に
、
は
っ
と
さ
せ
ら
れ
た。「美しく
死
ぬ」という言葉は初めて聞いたものでは

祖父が亡くなった頃から、私は「死」と

い
う
言
葉
に
敏
感
に
な
っ
た
よ
う
に
思
う。少
し
前
ま
で
元
気
に
話
し
て
い
た
祖
父
が
、
病
に
よ
っ
て
明
ら
か
に
弱
っ
て
い
く
の
を
見
て
、
た
だ
た
だ
悲
し
か
っ
た
の
を
覚
え
て
い
る。祖父の亡くな
っ
た
直
後
の
顔
は
、
き
っ
と
こ
の
生
涯
、
忘
れ
る
こ
と
は
出
来
な
い
だ
ら
う。「最後は苦しまな
い
よ
う
に
、
機
械
は
外
し
て
も
ら
っ
た
よ」と祖
母

と垂れていた。あまりにもイメージと違っ
て
い
て
シ
ョ
ッ
ク
を
受
け
た
が
、
次
の
日
、
祖
父
は
納
棺
師
の
腕
に
よ
り
私
の
イ
メ
ー
ジ
通
り
の
顔
に
な
っ
て
い
た。納棺師ってすごいなと思
う
半
面
、
亡
く
な
っ
た
人
の
顔
を
無
理
や
り
変
え
て
し
ま
う
の
は
ど
う
な
の
か
と
い
う
怒
り
に
も
似
た
感
情
を
抱
い
て
い
た。数年が経ち怒りは興味
に
変
わ
り
始
め
る。そんな時に目に留まった
の
が
、
私
が
感
銘
を
受
け
た
本、『納棺夫日記』
で
あ
る。納棺夫とは作者である青木新門氏
の造語で、彼が納棺夫として働く上で感じ
た
こ
と
、
経
験
し
た
こ
と
に
つ
い
て
綴
ら
れ
た
本

だった。読み進めていくと、鮮明に情景が思い浮かべられ、思わず本を閉じたくなるような気持ちになった。吐き気さえ覚えた。だが、それと同時に納棺時や納棺後に垣間見える彼の人間味が、私を感動させた。祖父を納棺した人は表情一つ変えなかった為、私の中で納棺師は冷酷だ、という固定観念があった。だが、それは私の勝手な考えに過ぎないことに気付く。納棺夫は仕事中には自分の感情を強く出さないものの、仕事後に自然に触れ涙を流すことが多々あった。まだ「死」が分からない女の子が、亡くなった母を見て「おかあちゃん、まだねむっているの?」と言って周りの人達が泣きわめくのを見ても、彼は涙ひとつ流さなかった。だが納棺後、竹藪で体の中に卵がびっしりと詰まったトンボを見て、彼はこう綴っている。「数週間で死んでしまう小さなトンボが、何億年も前から一列に卵を連ねて、いのちを続けている。そう思うと、ぼろぼろと涙が出て止まらなかった」。また、蛆の湧いた死体と対峙し、死体を棺に入れ、蛆の掃除をしている時には、「一匹一匹の蛆が鮮明に見えてきた。そして、蛆たちが捕まるまいと必死に逃げているのに気づい

た。(中略) 蛆も生命なのだ。そう思うと蛆たちが光って見えた」と述べている。私は彼の言葉に人間味を感じ、命の尊さについて深く考えさせられた。

さて、再び「美しく死ぬ」ことについて、作者の考えも含めつつ、私なりの答えを出そうと試みた。作者は「美しく死ぬ」とはどう死ぬことなのか具体的に示していないが、驚きも怒りもせず、ただ静かな死者を「美しい」と表現している一節がある。死体が半眼の状態でも、死者が善人でも悪人でも、たとえ蛆の湧いた死体でも、作者は「醜い」だとか「穢(けが)らわしい」だとか「不快だ」と思っていない。作者の目には生きている人より死者のほうが美しく見えるという。私はそこで、ふと思いついた。祖父が火葬される直前に見た顔を、綺麗だと思つた事に。その瞬間だけ祖父が人間でも死者でもない、何か仏のように見えた。納棺師のおかげだと思っていたが、本を読み終えた今考えると、違う気がする。大分時が経ってしまったからか、綺麗に見えたのは何故か、私には分からなくなってしまった。だが少なからず「美しく見えた」ことは確かだ。「美しく死ぬ」の「死ぬ」に視点を

変えてみる。「死ぬ」を言い換えると「生きた」になるのではないか、と思つた。「美しく生きた」。文章にすると尚更、しつくりくるように感じた。ああ、そうか。自分がどう生きたかによって「美しく死ぬ」ことができるのかできないのか決まるんだなと思つた。病気になつて死んでも、最期まで闘つた人とそうでない人、どちらが「美しく生きた」か明白だろう。

『納棺夫日記』を通して「生」と「死」により深く興味を持った。「美しく死ぬ」ために、「美しく生きよう」と決意した。人の役に立つこと、最後まで諦めないこと。今からでも遅くない。私は死んだ後に後悔しないよう、今を一生懸命生きたい。

再び本を開く時

作家

辻原登

『読めない本』（平井歩佳）

十歳の時、突然いなくなった母を追想して来た「私」と同じような境遇の人が本の中で先を走っている。私は抱え切れない心の葛藤を本に挟んでしまい込んだ。私はもうその本を開くことが出来ないのだ。やがて母と過ごした日数を母が不在の日数が追い抜こうとしている。その時だ、再び本を開くのは。どんな読書になるのだろうか。読みたい。

『前を見て歩く、それでも』（福永心雪）

「私」は耳が聞こえない。そして今まで見えていた視界が徐々に狭まっていく。本の中の少女が「夜」「ボール」「みんなだ」を手ばなしていったように、私もまた手ばなしかけている。文中で、寂しい、と福永さんは二度繰り返し返す。その「寂しい」には私たちが「生」の原点に立ち返らせ、粛然とさせる力がある。

『ハンチバックの私達』（佐野夢果）

『ハンチバック』という形で世間に存在することが私はとてつもなく恐ろしくそして嬉しいのかもしれない、と佐野さんは書き付ける。「心臓が握り潰されるみたいな読書」を通じて、強烈な恐怖と共に人間存在の根底に触れる。その先に希望の光が差して来る。そのことを佐野さんは確信している。

『洋服が転生したら猫を救った件』（佐竹華凜）

「年間およそ十億枚もの衣類が新品のまま捨てられている」という事実から、佐竹さんは地球人類に起きている様々な問題へと果敢に考察を進めて、先ず我々の蒙を啓いてくれる。ここまでは優れた認識者の役割を果たしたかと思うと、一転、その認識から実践へと移って動物愛護センターまで辿り着く。その軽快なフットワークが快い。

『私のクイズ』（南心結）

「クイズとは人生である」。どういうことだろうと戸惑いつつ、引つ張り込まれるようにして読み進めた。「人生とはクイズである」と言われると何となく分かるのだが……。ところが最後にこう来るのだ。「クイズが私の人生を作っているのだ。これが私のクイズだ」。これはもうウイトゲンシユタインの世界である。

『進化の過去と未来を探る』（小林慶悟）

私はこの作品に最も「読書」の醍醐味を感じる事が出来た。エッセイの旨みと言ってもよい。文章は明晰で、論理的かつ柔軟。「ダーウィンが行った進化の証明と、進化のために変化していく遺伝子」。この二つを系統発生（小林君は卵からひよこを孵かえしている）の視点から読み解き、進化論自体の進化へと考察を進める。

『それでも、聴き続ける』（杉山桐唯）

「私が他人にできること」というのは「その人の内なる声を聴くこと」なのだ、という認識に達するまでの粘り強い思考の軌跡が綴られている。「他の気持ちは完全には分からない」からこそ「他人と関わっていい」という気概」を新たにする杉山さんの勇氣。

『外見だけが美しさじゃない』（又吉琉那）

美しく死ぬ。又吉さんはこの難題を自らに課して、道をさぐる。それは「祖父の死体と納棺師」という重い体験から始まるのだが、「美しく死ぬ」の「死ぬ」は、「生きた」と言い換えることが出来ることを発見する。そして、「美しく生きた」を「美しく生きる」へと現在形に変換する。それは又吉さん自身の人生に重なる。

さまざまな可能性

歌人

穂村弘

『読めない本』というタイトルに驚いた。そんな裏返しの読書体験が存在するのだろうか。だが、「私には読めない本がある」と始まる本作の内容には説得力があった。自らの感情の全てを注ぎ込んだ本を再読できないでいるうちに、「私」は作中の主人公と「同じ年になった」という。その事実が「母と過ごした日数を母と離れた日数が追いつぬかしそう」という一文と響き合せて胸に迫る。

現実の母との関係がどうなるかはわからない。だが、未来のいつか、再読の日は来ると信じたい。それは「十歳の私」との再会でもあるのだろう。

『前を見て躰く、それでも』に記された「前を見て歩きなさい」とは、母親が子どもを叱る際の定番フレーズだろう。だが、「私」は或る事情から、母から「前を見て歩きなさい」とは言われなくなる。にも拘わらず、終盤に再び「前を見て歩かねばならない」という一文が現れて、はっとさせられた。これは母からの注意によるものではなく、自らの決意なのだ。そこに痺れる。「前を見て歩きなさい」が現実の行為の話であるのに対して、「前を見て歩かねばならない」は生きることのメタファーになっている。心の動きに伴う言葉の位相の変化に注目した。

『ハンチバックの私達』の冒頭に目が吸い寄せられた。「そして読了した今。一度取り出された臓器は、膨大な何かを詰め込まれ、私の体内に戻ってきた。その臓器から送り出される血液はあまり

に速く、身体が張り裂けそうな感覚に陥った」。それほど強烈な読書体験があるとは。生まれ変わりに似たこの感覚が文章の隅々にまで反映している。「とてつもなく恐ろしくそして嬉しい」「強烈な恐怖と共にこの本に救われる」「この本を読んで欲しくないという感情と共に(略)この本が社会全体に広まり、括られない社会になることを」。逆方向に引き裂かれてスパークする思いに惹きつけられた。

『進化の過去と未来を探る』は「ミイデラゴミムシ」の話から始まっている。生物の進化という大テーマについて具体例を挙げて語り出すことで読者は引き込まれる。ロジカルに構築された文章はわかりやすく、「現在も進化論自体が進化し続けているとされる」といった語りには詩的なニュアンスもある。「夢見ている」「考えている」「確信している」といった語尾の使い分けにも、作者の明晰さが現れているようだ。

『お洋服が転生したら猫を救った件』においては、「この一冊の本が、私の行動力をかき立て、小さな一歩を踏み出させた」という言葉の通り、作者の読書体験と行動が密接に繋がっていた。「知ることから始まった「小さな一歩」のドミノ倒しが、最終的には動物愛護センターへの寄付にまで至るとは。その流れを「お洋服が転生したら猫を救った件」というタイトルにまとめるセンスもユニークだ。

『私のクイズ』は、終盤の「そして今、私はクイズを食べている」という一文からの流れが面白い。読書体験記には主人公が自分と似た境遇の本が選ばれることが珍しくないのだが、『私のクイズ』も途中までは「主人公の気持ちがよくわかった」という共感ベースである。その場合、現実の自分と作品の関係はパラレル。だが、ラストに逆転が起こる。そこで「私」が指針としている「クイズ」による体験はランダム。解けば解くほど自分が新しくなっていくのだ。

『それでも、聴き続ける』は可聴音域外の声を踏まえたタイトルが印象的だ。読書体験の成果が、けれども現実レベルにおいては「むしろ他人との関係が複雑に感じられて、距離がつかめなくなった」という失敗に終わる。その感覚には覚えがある。だが、作者は諦めなかった。物語から受け取った「他人と関わっていいこうという気概」とは、うまくいく保証のない世界を生きるうえで、いわばメタレベルの希望なのだろう。

『外見だけが美しさじゃない』は、「美しく死ぬ」とはどういうことか、という難問を扱っている。実体験、読書体験の果てに、作者の意識は「美しく死ぬ」という言葉そのものに向かってゆく。『死ぬ』を言い換えると『生きた』になるのではないか。すると、「美しく死ぬ」は「美しく生きた」に変わる。問いがそのまま答えになった。この転換がスリリングで素晴らしい。

書物が私たちにしてくれらるること

作家

角田光代

『それでも、聴き続ける』を書いた杉山桐唯さんは、いじめを見過ごすことができず、行動に移した経験について、それがたまたまだったのかどうかずっと考え続けている。そうして読書によって、ただしいともまちがいのちがう、ひとつの結論にたどり着いた。読んでいて爽快な気分になった。

『進化の過去と未来を探る』を書いた小林慶悟さんは、生物学者として研究することを夢見ている。『ダーウィンと進化論』を読み、「漸くつながった」と書いた理解は、きつと小林さんの礎になるだろう。最後の段落を読み、私は温故知新という言葉を使った。古きを知り、まさにこれから小林さんは未来の研究に進んでいくのだとたのもしく思った。

今回、もつともユニークだったのが南心結さんの『私のクイズ』だ。『君のクイズ』を読んだとき、クイズ界に疎い私はすごい世界があるものだと思いますが、そのすごい世界に南さんは生きています。「クイズが私の人生を作っている」、この言葉に、『スラムドッグ\$ミリオネア』という映画を思い出した。クイズと人生は、たしかにある意味でしっかりとつながっている。未見だったらお薦めします。

『外見だけが美しさじゃない』を書いた又吉琉那

さんは、読書をきっかけに、エンゼルケアへの怒りを興味にかえ、死にたいする考えをかえた。「死ぬ」を言い換えると『生きた』になるのではないか」という気づきがすばらしいと思った。ラストの、「死んだ後に後悔しないよう」というのはつまり、「生きた後に後悔しないよう」ということで、今この瞬間も無駄にはすまいという強い決意だ。

佐竹華凛さんの『お洋服が転生したら猫を救った件』はじつに今日的な問題を扱っている。洋服が大好きな佐竹さんが、それでも洋服の大量消費について考え、ついには未使用品を朝市で販売する。その行動力には拍手を送りたい。

福永心雪さんの『前を見て躓く、それでも』には、本にいったい何ができるか、ということが具体的に書かれている。難病の少女の物語は、難病を抱える福永さんに寄り添い、励ます。やるか、やらないか。福永さんが読み、そして自身の言葉としてとらえなおしたこの言葉は、私にも強く響いた。

佐野夢果さんの『ハンチバックの私達』の文章にも、小説が、ひとりの人間に強烈な光を投げかけるさまがありりと描かれている。その光について佐野さんは「強烈な恐怖」であり、でも「救われるかもしれない」と書いている。自身の心にかたいしての正直さ、それを言葉にする真摯さが、

この文章の強さになっていると私は思った。読んでいて心が震えた。

小説のなかに友だちを見つめることはよくある。その友だちは私たちとともに成長したり、あるいは私たちの成長を見守ってくれたりする。このことが比喩や幻想でないと、平井歩佳さんの『読めない本』がはつきりと告げている。『車夫』のシリーズに登場する走は、平井さんにとって現実の何よりもだれよりも、「救い」であったし、平井さんの思いを受け止める大いなる何かだった。あまりにその存在が強すぎて、平井さんは今、「怖くて読めない」と正直に書く。ここには本の持つ凄みが書かれている。いつか平井さんが、走と再会し、笑顔で言葉を交わす日がくることを、願わずにはいられない。

読書の先に待つもの

文部科学省
初等中等教育局主任視学官

宮崎活志

読書の先には、常に「満足」や「気付き」「希望」などが待っているわけではない。時には、背負いきれない感情に押し潰されそうになることもあるだろう。平井歩佳さんの『読めない本』は、そのような読書体験を丁寧に描いていて、読む人の胸も締めつけられる。十歳で別れた母への思いは混沌としたままその本に閉じ込められた。そして、それは読み返すことができない本になった。平井さんが心穏やかに読み返すことができる日が来ることを、この体験記を読む人は皆願うだろう。

福永心雪さんの『前を見て躓く、それでも』は、難病の診断を受け、現在の聴覚の障害に加えて視覚を失う恐れもある自分が、読書によって、未来を受け入れ、力強く生きようと決意するに至った体験を描く。難病の診断を受けたことは深刻ではあるが、福永さんの文章にはどこか明るい光が感じられる。その明るさが、読む人の共感を呼び、ともに前向きに人生を生きていこうという思いとなつて広がっていくのだろう。

佐野夢果さんの『ハンチバックの私達』は、二〇二三年上半期の芥川賞受賞作品として大きな話題となった『ハンチバック』の読書体験。同じ障害のある佐野さんの「括られない社会になることを」という期待の言葉は大きな意味を持つ。障害のある人だけでなく、「女」「男」「高齢者」「Z世代」

等々。ひと括りにすることで思考停止し、妥協しようとする私達の在り方を問いただす言葉でもあからだ。ここにも価値ある読書体験があった。

佐竹華凛さんの『お洋服が転生したら猫を救った件』では、読書から学んだ「大量廃棄社会」の背景にある地球規模での生産と消費の構造が語られる。そして、その読書の先に待っていたのは、地元のフリーマーケットで廃棄予定の洋服を販売する自分の姿だった。売上金は動物愛護センターへの寄付となり、殺処分予定の猫を救うことになった。「大量廃棄社会」を告発する「小さな一歩」は、しかし、決して小さくはないだろう。

南心結さんの『私のクイズ』は、「クイズとは人生である」という言葉から始まる。文章全体に「クイズ道」を究めるような趣がある。クイズとは単なる知識の切り売りではなく、私達が生きる物質的精神的世界の知的探究なのだろう。この読書体験記で印象に残ったのは、互いに支え合う「仲間」の存在だ。仲間を励まし対戦相手の存在も尊重するクイズプレイヤーの精神は、まさに「クイズ道」に適うものと言ってもよいのではないか。

小林慶悟さんの『進化の過去と未来を探る』を讀んで感じるのは、過去から未来へという時間の流れの中で大切にされる科学的精神だ。それは合理的であり原理的であり論理的なものの方・考

え方だ。将来は生物学者として遺伝子の側面から進化を研究したいという小林さんには、そうした科学的精神が明確に感じられる。読書の先には科学者としての未来が待っているようだ。読書体験がより良い世界の実現につながることを期待する。誠に残念なことだが、学校でのいじめがなくならない。そして、いじめはほぼ全ての地域と学校で起こり得る。杉山桐唯さんの『それでも、聴き続ける』は、読書体験記として、この問題を正面から取り上げた。「安易な善意」「その人の内なる声を聴く」という言葉が強く印象に残る。そして、その読書を通して「他人と関わってほしい」という「気概」を受け取った杉山さんにエールを送りたい。他者の気持ちを聴き続けてくれる人たちにも。

又吉琉那さんの『外見だけが美しさじゃない』は、人間の死を尊厳あるものとして整えてくれる納棺夫の仕事とその思いが描かれた書籍の読書体験。又吉さんは、「美しく死ぬ」とはどう死ぬことかということを考える。そして、「死ぬ」とは「生きた」ということだという気付きに至る。終末では、「美しく死ぬ」ために「美しく生きよう」という決意が語られる。読書の先に待っていたのは、今を一生懸命生きようという自覚だったようだ。

高校生の皆さんのみずみずしい感性と良書とが出会う機会に立ち会えたことに感謝します。

言語化による再発見

——ことばは思いにカタチを与える——

全国高等学校校長協会

林 達也

今年度も力作が揃いました。作者の経験や体験、置かれている環境に圧倒される作品が多く、文章にはない今までの日々や今後について深く考えさせられました。

平井歩佳さんの『読めない本』はタイトルが秀逸でした。「読書体験記コンクール」であるのに、なぜ読めないのかと惹きつけられます。人間はいろんな感情を持つ生き物ですが、言語化するのに困難な思いを背負って生きていること、押しつぶされそうになりながらも「読めない本」を支えとして自らの人生を受け入れて生きていることに、ただただ圧倒されました。

福永心雪さんの『前を見て躓く、それでも』もご自身が今まさに直面している課題、困難さに立ち向かう勇気をもって向き合う覚悟が書かれています。「できる」状態はそれが当たり前の世界です。「できない」ことを受け入れるのは、頭では理解しても心は納得してくれません。「できる」できない」から「やるか」やらないか」への飛躍は、まさに葛藤だと思います。「粘り強く前向きに私の人生を生きてみせよう」という福永さんを心から応援しています。

佐野夢果さんの『ハンチバックの私達』には圧倒されました。タイトルは「私達」と複数形になっ

ています。障がいの有無に関わりなく、私達人間が本来持つ本能的な衝動を感じ取っているのだと思います。周囲からの「善意」の言葉に「違和感」が「強烈な嫌悪感に変わっ」ていく自分自身の心象をすっきり書けないからこそ、ただどしく書かれており、その重みとともに背負っているものを感じ取ることができました。

杉山桐唯さんの『それでも、聴き続ける』は、周囲で起こったいじめへの自分のとった行動を振り返り、相手の「内なる声を聴くこと」ができなかったと、強く後悔しています。しかし、見て見ぬふりできずに行動したことは、社会の中では大切なことだと思います。もともと何かできたと思えるのは杉山さんが傍観者ではなかったからです。南心結さんの『私のクイズ』は、一読しただけではこの文章が「読書体験記」とどう結びつくのかわからず不思議な思いでした。「私はクイズを食べている」「クイズがこれからの行動を決める」という文言から南さんのクイズへの圧倒的な思いが伝わってきました。クイズがあって、それに關わる本が存在した、「初めにクイズありき」ということなのでしょう。

小林慶悟さんの『進化の過去と未来を探る』は、『ダーウィンと進化論』を読み、過去だけではな

く未来の生物の姿に思いを馳せていきます。環境と進化の関わりなどパラメータが多く謎は深まるばかりです。生物の進化に必然性はなく、結果として環境に適応した生物が存在しているにすぎません。「生物—環境—倫理」と複合的な問題です。「遺伝子研究が未来の世界をより良いものにする」と確信する「思いを心強く受け止めました」。

又吉琉那さんの『外見だけが美しさじゃない』は、生と死について語っています。又吉さんは当初は死に化粧に対し嫌悪感を抱いていましたが、『納棺夫日記』を読んだことで生と死が断絶したものではないことに気づき、見た目ではなく、実質に目を向けて生きていくことを決意します。死から学ぶ生があり、生があるから死があるので、死ね。

佐竹華凜さんの『お洋服が転生したら猫を救った件』は、『転生したらスライムだった件』を思い出させるタイトルです。佐竹さんは、洋服の大量廃棄の実態を知ると、早速行動力を発揮します。佐竹さんの行動は一人のものではありません。多くの周囲の人たちに影響を与えています。一人にとっては小さな一歩でも人を巻き込むと大きなうねりになります。今後が楽しみです。

第43回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

【優良賞】 39編

（ ）内は体験書籍名

北海道	道立	帯広柏葉高等学校	三年	齊藤小桃	明日、死にたくない（『正欲』）
青森県	県立	八戸高等学校	三年	漆戸すみれ	心は何も間違っていない（『君は君の人生の主役になれ』）
岩手県	県立	盛岡北高等学校	二年	齋藤芽生	〃当たり前〃を疑って（『神様がくれたピンクの靴』）
宮城県	県立	仙台二華高等学校	一年	大山海希	内に潜めしナニモノか。（『檸檬』）
秋田県	県立	秋田北高等学校	一年	村上 響	想像力を持つこと（『流浪の月』）
山形県	県立	山形工業高等学校	三年	花邑音波	言葉を楽しむ（『舟を編む』）
茨城県	県立	鉾田第一高等学校	一年	木村秀狼	マイエッセンシャルリズム（『エッセンシャル思考 最少の時間で成果を最大にする』）
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	内田真緒	工場の鍵（『思考の整理学』）
群馬県	県立	高崎女子高等学校	一年	大澤眞子	私らしさを知る秘訣（人間関係をしなやかにするたったひとつのルール はじめての選択理論）
埼玉県	私立	星野高等学校	一年	山中貴湖	先生は十人十色（『せんせい。』）
東京都	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	一年	二井内志緒里	心に耳を傾ける（『苦海浄土 わが水俣病』）
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	板垣陽菜	明日はこないかもしれないから（『がんになって良かった』と言いたい）
富山県	県立	富山中部高等学校	一年	武隈里紗	自分の意志で選び取る未来（『逆ソクラテス』）
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	三年	米口らく	転落に関する人生の一考察（『小林秀雄全集 別巻1』）
福井県	県立	高志高等学校	二年	稲村未歩	言葉のかけがえなさ（『残像に口紅を』）
山梨県	私立	山梨英和高等学校	二年	古郡美空	本愛つるわたし（『新潮日本古典集成（新装版） 堤中納言物語』より「虫愛つる姫君」）
長野県	県立	上伊那農業高等学校	三年	飯塚咲絵	私の普通は誰かの憧れ（『こどもホスピスの奇跡』）
岐阜県	県立	本巣松陽高等学校	三年	国藤綾乃	10年読み返す本（『哲ねこ七つの冒険』）
愛知県	県立	豊田西高等学校	二年	居倉史佳	夜は明けなくてもいい（『夜明けのすべて』）
滋賀県	県立	水口東高等学校	一年	勝本絢心	幸せのあり方（『そして、バトンは渡された』）
京都府	私立	京都女子高等学校	二年	中野優那	だるまちゃん（『未来のだるまちゃんへ』）
大阪府	私立	ヴェリタス城星学園高等学校	二年	平山 舞	道の曲がり角（『赤毛のアン』）
兵庫県	私立	小林聖心女子学院高等学校	一年	庭本真珠子	我ながらおませな感性（『春の雪』）
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	上野山朋花	「本当の自分」へ踏み出す勇氣（『あまのがわ』）
鳥取県	私立	米子北斗高等学校	一年	中原利花	生き方（『君たちはどう生きるか』）

島根県	県立	松江北高等学校	二年	勝部帆風	「知ろう」という気持ち（『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』）
岡山県	県立	倉敷商業高等学校	一年	吉川茉莉奈	「希望」を求め、「変化」を求める（『希望のつくり方』）
広島県	私立	崇徳高等学校	一年	安武彩羽	墨の三原色（『墨のゆらめき』）
徳島県	県立	城西高等学校	三年	三谷まい	私の姉（あなたを愛しているつもりで、私は――。娘は発達障害でした）
香川県	県立	高松高等学校	二年	平子紗雪	愛を建前に使うなよ（『愛されなくても別に』）
愛媛県	県立	松山盲学校	二年	杉山 新	マジョリテイとマイノリテイの間で（『コンビニ人間』）
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	泉 小遥	愛情と干渉（『星を掬う』）
福岡県	県立	筑紫丘高等学校	一年	右橋 糸	「言葉」の海を渡る舟（『舟を編む』）
佐賀県	県立	佐賀西高等学校	一年	田代フエドンスコット海	諦めを知って（『影に対して 母をめぐる物語』）
長崎県	県立	猶興館高等学校	二年	山口紗瑛フェイス	声なき声（『しっぽの声』 1〜13巻）
熊本県	私立	熊本信愛女学院高等学校	二年	増田莉子	「私」を生きたる（『レインツリーの国』）
宮崎県	県立	宮崎大宮高等学校	一年	明松奈緒	ひらくく本を開く、道を拓く（『動物農場』）
鹿児島県	国立	鹿児島工業高等専門学校	一年	濱砂妃茉莉	自然の楽しみ方（『情景』とは選り辞典）
沖縄県	県立	知念高等学校	二年	徳元莉海	伝えたい（『空洞日記 ママ、脳腫瘍と闘ってくるよ!!』）
【入選】 182編（各県の校名・氏名は五十音順）					
北海道	道立	帯広柏葉高等学校	二年	角谷樹環	幻想世界で生きる（『生物と無生物のあいだ』）
	道立	札幌国際情報高等学校	二年	稲原稟子	私が紡いでいく物語（『ムーラン』）
	道立	札幌月寒高等学校	一年	成田百花	繋ぐ（『今夜、世界からこの恋が消えても』）
	道立	札幌南高等学校	一年	沼田嘉穂	「気持ち悪く」なること（『しろいろの街の、その骨の体温の』）
青森県	県立	八戸高等学校	一年	泉あかり	教育の未来（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』 2）
	県立	八戸高等学校	二年	小向梨紗	話し方で人生が変わる（『人は話し方が9割』）
	県立	八戸高等学校	二年	佐藤寿里	それなら目をつぶりましょう（『今宵も喫茶ドードーのキッチンで。』）
	県立	八戸西高等学校	一年	春日璃子	普通の定義（『木先生』）
岩手県	県立	一関第一高等学校	一年	三浦夕乃	「普通」とは（『普通のノウル』）
	県立	盛岡北高等学校	一年	中塚紗江	知ることを大切に（『いのちの食べかた』）
	県立	盛岡第一高等学校	一年	岩崎晏奈	生きづらい（『カーテンコール!』）
	県立	盛岡第一高等学校	一年	平田結乃	自分らしさ（『諦める力』）
宮城県	県立	仙台二華高等学校	一年	堀米咲希	幸福の攻略法（『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』）

	県立	仙台南高等学校	一年	鈴木千恵	生きる(「いちご同盟」)
	私立	古川学園高等学校	一年	田代悠太	「存在」改革(「なるたる12 骸なる星珠たる子」)
山形県	県立	新庄北高等学校	二年	鈴木柊花	私宛ての本(「かがみの孤城」)
	県立	山形工業高等学校	二年	佐竹輝成	学びという財産(「なんのために学ぶのか」)
	県立	山形中央高等学校	一年	岩崎歩佳	いつかすべてが私の力になる(「いつかすべてが君の力になる」)
	県立	山形西高等学校	一年	毛利芽子	絆が紡ぐ音色(「ラプカは静かに弓を持つ」)
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	七海柚芭	出会い(「レインツリーの国」)
	県立	安積黎明高等学校	一年	福田 要	さらめきをみつけた(「くもをさがす」)
	県立	相馬高等学校	二年	半谷安南	誰かの狐になるために(「星の王子さま」)
茨城県	私立	水城高等学校	二年	永井遼太郎	恐れるな、勇気をもて(「宇宙のみなしご」)
	私立	聖徳大学附属取手聖徳女子高等学校	一年	山崎彩夏	目的の奴隷(「暇と退屈の倫理学」)
	県立	取手第二高等学校	一年	木田麻理香	私の生き方(「また、必ず会おう」と誰もが言った。)」
	県立	水戸第一高等学校	二年	鈴木なぎさ	何を求めて生きるか(「漫画君たちはどう生きるか」)
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	一年	野澤 花	未来へのバトン(「今夜、世界からこの恋が消えても」)
	国立	小山工業高等専門学校	二年	佐藤叶夢	潮騒を織る(「老人と海」)
	国立	小山工業高等専門学校	三年	廣田 凜	透明な線を越えて(「准教授・高槻彰良の推察 民俗学かく語りき」)
	県立	鹿沼東高等学校	一年	木村 匠	野球は人生の教科書(「敗者たちの季節」)
群馬県	県立	渋川女子高等学校	二年	齊藤 玲	集団心理の危うさ(「23分間の奇跡」)
	私立	高崎健康福祉大学高崎高等学校	二年	町田凜子	幸せかどうかは私が決める(「コンビニ人間」)
	県立	玉村高等学校	二年	丸山結花	人生の脚本(「多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ。」)
	県立	前橋女子高等学校	一年	高橋理愛	どこにいても…(「星を掬う」)
埼玉県	私立	浦和学院高等学校	二年	廣江優佳	サウダージ(「LGBTを読みとく クイア・スタディーズ入門」)
	県立	川口北高等学校	三年	澤田裕翔	モネのようにはいかない(「センスのいい脳」)
	私立	城西大学付属川越高等学校	二年	坂口真寛	生活甘受(「青が散る」)
	私立	星野高等学校	二年	糸井綺芭	挑戦は自分を変えられる(「金の角持つ子どもたち」)
千葉県	私立	敬愛学園高等学校	二年	京増咲良	声と駅伝(「あと少し、もう少し」)
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	池田優月	異なりを超えて共に過ぐす世界(「異なり記念日」)
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	桑田明奈	マイノリティとして生きる価値(「マイノリティデザイン 弱きを生かせる社会をつくらう」)
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	三年	井上 颯	真のアイデンティティとは(「私とは何か 「個人」から「分人」へ」)

東京都	私立	学習院女子高等学校	二年	松永麻里	男女の境界線〔片想い〕
	私立	恵泉女学園高等学校	一年	信夫凜子	キャンパスの上の感性〔赤と青とエスキース〕
	私立	聖徳学園高等学校	二年	生方千代美	私でいたから〔そして、バトンは渡された〕
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	一年	今田莉里	考えることをやめないこと〔苦海浄土 わが水俣病〕
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	一年	岡田陽依	三年で得た強さ〔おくることば〕
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	大西柚花	都会で見えたもの〔ちいさいおうち〕
	私立	横浜共立学園高等学校	一年	築田 優	二足す二からの出会い〔一九八四年「新訳版」〕
	私立	横浜雙葉高等学校	二年	松永優花	La Petite Grandmère 〔最愛の祖母に寄せて〕〔星の王子さま〕
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	小林 楓	道は拓けし歩けよ乙女〔夜は短し歩けよ乙女〕
	県立	高田北城高等学校	一年	村上 音	「それしかないわけない」で広げる選択肢〔それしかないわけないでしょう〕
	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	三年	石崎有羽希	また出会いたいもの〔ほくの宝ばこ〕
	私立	東京学館新潟高等学校	二年	手代木 幸	「本が導く」「戦争のない平和な世界」への一年後〔みんなの「わがまま」入門〕
富山県	県立	高岡高等学校	二年	上野真由	「強さ」とは〔本当に強い人、強そうで弱い人、心の基礎体力の鍛え方〕
	県立	高岡龍谷高等学校	二年	角 萌々音	人生に「逃げる」というコマンドを〔犯人は僕だけが知っている〕
	私立	砺波高等学校	一年	中谷怜生	僕のがばいばあちゃん〔佐賀のがばいばあちゃん〕
石川県	県立	金沢向陽高等学校	二年	濱島桃羽	生きる力〔五体不満足〕
	県立	金沢桜丘高等学校	二年	山寺希実	不登校にはどんな支援が必要か〔学校、行かなきゃいけないの？ これからの不登校ガイド〕
	県立	金沢二水高等学校	一年	中出芽衣	誰かのために〔夢に向かって泳ぎきれ〕
	県立	鹿西高等学校	二年	河内椋音	言葉の力〔真夜中の底で君を待つ〕
福井県	県立	大野高等学校	二年	竹田知世	幸せなおやつつの時間〔ライオンのおやつ〕
	県立	武生東高等学校	三年	山岡優花	頭がよくなる云々〔アルジャーノンに花束を〕
	県立	藤島高等学校	二年	林 希美	感謝の気持ちをお忘れな、〔わたし8歳カカオ畑で働きつけて。児童労働者とはばる2億800万の子もたち〕
山梨県	県立	若狭高等学校	二年	原田 蒼	私たちが歌う理由〔よろこびの歌〕
	県立	甲府東高等学校	一年	後藤 凜	人と人との信頼とは何か〔ラプカは静かに弓を持つ〕
	県立	甲府南高等学校	二年	小林慶多	「境界」で生きる十四パーセントを知って〔ケーキの切れない非行少年たち〕
	県立	甲府南高等学校	二年	森本紗英	「また必ず会おう」と言いあえるように〔また、必ず会おう〕と誰もが言った。〔
	県立	甲府南高等学校	二年	山中花乃	一冊の本に込めた私の願い〔「空気」を読んでも従わない、生き苦しさからラクになる〕
長野県	県立	上伊那農業高等学校	三年	酒井琴瀬	体験記の「ページ目」〔かがみの孤城〕
	県立	中野西高等学校	二年	海谷陽菜	命の尊さ〔あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。〕
	県立	中野西高等学校	二年	海谷陽菜	愛のもつもの〔MOONCHILD 鎮魂歌「レイイム」篇〕

	私立	松本第一高等学校	一年	望月 舞	人間は水の分子（「君たちはどう生きるか」）
	私立	松本第一高等学校	二年	中垣香深	「自分のため」に生きるコツ（「誰かのため」に生きすぎない 精神科医が教える力を抜いて生きるコツ）
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	天神林煌希	私の平和観（「野火」）
	県立	加茂高等学校	一年	池戸 響	思考を放棄した世界（「華氏451度 新訳版」）
	県立	岐阜北高等学校	一年	安藤 鈴	救い（「ロスト・ケア」）
	県立	飛騨高山高等学校 定時制	四年	上手愛華	ありがとう神様（「さよなら神様」）
静岡県	県立	掛川西高等学校	一年	柴田真由子	私の体は、私次第。（「記憶する体」）
	県立	掛川西高等学校	二年	奥山秋乃	繋がる想いを射に込めて（「あと少し、もう少し」）
	市立	静岡市立高等学校	二年	小林桃花	一つのものに思いをのせて（「あと少し、もう少し」）
	私立	静岡雙葉高等学校	二年	池田菜々	社会に対抗する着くずしファッション（「ちぐはぐな身体 ファッションって何？」）
愛知県	県立	一宮興道高等学校	一年	飯田結衣	支え合いとは（「20歳のソウル」）
	国立	豊田工業高等学校 専門学校	一年	浜谷聡介	子供の自由（「ハックルベリー・フィン」の冒険）上・下）
	県立	豊田東高等学校	二年	杉村菜々花	共に生きる（発達障害のある子どもに寄り添う大切な「ミカタ」）
	県立	豊橋東高等学校	一年	兵藤 蕾	つくり手としての闘争心（「手塚治虫のマンガの教科書 マンガの描き方とその技法」）
三重県	私立	暁高等学校	一年	清水結菜	応援してもらえる自分に（「青空トランペット」）
	私立	暁高等学校	二年	川上さくら	幸せとは何か（「また、同じ夢を見ていた」）
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	亀井天翔	弦音の響き合う場所（「ツルネ 風舞高校弓道部」）
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	山口丹衣奈	大切なものを大切にするために（「エッセンシャル思考 最少の時間で成果を最大にする」）
滋賀県	県立	高島高等学校	一年	落川愛心	アシユリーの思いを胸に（「みじかい命を抱きしめて」）
	県立	高島高等学校	二年	岡田瑞希	私の色をより鮮やかに（「カラフル」）
	県立	東大津高等学校	一年	上尾仁志	私の色（「さよなら、灰色の世界」）
	県立	東大津高等学校	一年	水谷心春	成すもの（「泣かない女はいない」）
京都府	府立	桂高等学校	一年	吉田春輝	未来の成功への鍵（「勝利の流れをつかむ思考法 F1の世界でいかに崖っぷちから頂点を極めたか」）
	府立	桂高等学校	二年	山田彩楠	栄冠は君に輝く（「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」）
	私立	京都女子高等学校	二年	榊 天寧	生きる選択をし続けるほくら（「生きるほくら」）
	私立	立命館高等学校	二年	澤田風花	普通は変わる（「戦中・戦後の暮しの記録 君と、これから生まれてくる君へ」）
大阪府	府立	いちりつ高等学校	二年	木原千咲子	よい大人（「星の王子さま」）
	私立	ヴェリタス城星学園高等学校	三年	和泉奈優	世界は一つじゃない（「空中ブランコのりのキキ」）
	国立	大阪教育大学附属高等学校 平野校舎	一年	吉川聡汰	劣等感最高のガソリン（「天才はあきらめた」）
	府立	河南高等学校	一年	才 理菜	生きる道を選んだ私（「さよなら嘘つき人魚姫」）

兵庫県	県立	柏原高等学校	二年	余田 温	進学を決めたもの（『青春を山に賭けて』）
	私立	関西学院高等部	二年	川田江梨花	内なる変身を求めて（『変身』）
	県立	神戸高等学校	一年	竹内遥人	本と人、青（『DIVE!!』）
奈良県	県立	神戸高等学校	二年	河野虹子	私と父の夏の庭（『夏の庭 The Friends』）
	私立	育英西高等学校	二年	古林環奈	夢へのアプローチは何度でも（『スタートライン』）
	県立	畝傍高等学校	二年	駒峯ちひろ	52ヘルツの声（『52ヘルツのクジラたち』）
	県立	青翔高等学校	二年	小林大悟	ふるさとの森から（『FOREST』）
	県立	高田高等学校	一年	片山ひかり	感謝・努力・挑戦（『一瞬の風になれ』）
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	豊田杏梨	幸せに付随する辛さを恐れて（『今夜、世界からこの恋が消えても』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	中原龍一郎	私が努力する理由（『小さき者へ／生まれ出づる悩み』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	谷 和佳乃	えんじょうは語る（『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	保田菜帆	伝えたかった言葉（『そして、バトンは渡された』）
鳥取県	私立	青翔開智高等学校	二年	西村和丸	僕流 人生コントロール術（『腹を割ったら血が出るだけさ』）
	私立	鳥取敬愛高等学校	二年	内藤菜々子	ステップファアザー（『そして、バトンは渡された』）
	県立	鳥取西高等学校	一年	山本結菜	忘れるということ（『飽きっぽいから、愛っぽい』）
	県立	鳥取西高等学校	二年	広沢優花	私の踏切板（『四十九日のレシビ』）
島根県	県立	出雲高等学校	二年	手納友世	「詩」と「日本国憲法」それから「私」（『日本の憲法 最初の話』）
	県立	出雲高等学校	二年	山上敦也	愛する人を、介護する（『いのちの十字路』）
	県立	松江南高等学校	一年	竹中 玲	感謝と笑顔（『そして、バトンは渡された』）
	県立	横田高等学校	二年	嵐谷汐莉	将来にむけて（『僕が恋した、一瞬をきらめく君に。』）
岡山県	県立	岡山朝日高等学校	一年	池田一帆	僕は走り始める（『ランナー』）
	県立	倉敷天城高等学校	一年	木下詩織	多数派に縛られない（『正欲』）
	県立	倉敷青陵高等学校	一年	三宅咲蘭	光溢れる「私」へ（『光待つ場所へ』より「しあわせのこみち」）
	私立	清心女子高等学校	一年	池田優花	本当の自分（『鬼滅の刃』）
広島県	私立	盈進高等学校	二年	大島弓依	アンネの命と私の命（『アンネの日記 増補新訂版』）
	国立	広島大学附属高等学校	二年	神尾惺那	音楽の持つ力（『ラプカは静かに弓を持つ』）
	市立	広島市立基町高等学校	一年	釘野優花	世界を、変える（『音のない世界と音のある世界をつなぐ、ユニバーサルデザインで世界をかえたい』）
	市立	広島市立基町高等学校	一年	真野なるみ	生きる力（『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』）
山口県	県立	岩国高等学校	二年	金山咲星	責任（『心音』）
	県立	岩国高等学校 坂上分校	一年	長野虹心	私の進むべき道（『泣いちゃいそうだよ《高校生編》未来への扉』）

県立	下関西高等学校	一年	米谷理央	貧困について知る（『死にそうだけど生きてます』）
県立	萩商工高等学校	一年	阿武柊嶺	半透明に色を塗る（『半透明のラブレター』）
徳島県	県立 名西高等学校	二年	蓮池惺名	言葉で紡ぐ想い（『ぎょらん』）
県立	脇町高等学校	一年	江口結菜	犬の言葉（『少年と犬』）
県立	脇町高等学校	一年	森浦優菜	聴こえない声を探して（『52ヘルツのクジラたち』）
県立	脇町高等学校	一年	吉川優美	身近なしあわせ（『青い鳥』）
香川県	県立 高松高等学校	二年	津田悠花	「はじめて」を大切に（『はじめての』）
県立	高松西高等学校	二年	堤 優菜	狭間の十七歳（『海辺の金魚』）
県立	丸亀高等学校	一年	坂井 葵	本当の自分を大切に（『空気』を読んででも従わない 生き苦しさからラクになる）
県立	丸亀高等学校	二年	木村優花	医療において大切なこと（『サイレント・プレス』）
愛媛県	県立 伊予高等学校	二年	入江來未	私が世界を変える日（『あなたが世界を変える日』12歳の少女が環境サミットで語った伝説のスピーチ）
県立	伊予高等学校	二年	山本悠瑞希	旅するラゴスの後継者として（『旅のラゴス』）
県立	済美高等学校	一年	亀岡千空	時代を越えて受け継ぐべきもの（『空白の天気図』）
県立	長浜高等学校	三年	佐伯華未	自分を好きになる生き方（『あやうく一生懸命生きるころだった』）
高知県	県立 安芸高等学校	三年	小松 薫	多くの人を救う人に（『満天のゴール』）
県立	高知小津高等学校	一年	須藤 優	墮ちるまでに（『滅びの前のシャングリラ』）
県立	高知学芸高等学校	二年	越智洗太郎	私のペンが動く時（『世の中への扉 戦争を取材する 子どもたちは何を体験したのか』）
福岡県	県立 高知学芸高等学校	二年	十萬詩桜	空の向こう（『手のひらの京』）
県立	小倉南高等学校	二年	尾林拓哉	行動力（『チーズはどこへ消えた？』）
県立	修猷館高等学校	二年	西野智也	過去の扱い方（『鉄の骨』）
私立	明治学園高等学校	一年	野口侑愛	ゴールデンタイムの消費期限（『ゴールデンタイムの消費期限』）
佐賀県	県立 門司大翔館高等学校	二年	金澤奈々子	挑戦することでお会えるもの（『線は、僕を描く』）
県立	唐津東高等学校	一年	立川日彩	「平和のバトン」を永遠に繋ぐ（『平和のバトン 広島の高校生たちが描いた8月6日の記憶』）
私立	弘学館高等学校	一年	矢野愛佳	あなたの鉛筆になるために（『私の頭の中の消しゴム』）
県立	佐賀西高等学校	一年	田中響貴	幹（『宙ごはん』）
長崎県	県立 武雄高等学校	一年	川副結葉	「個性」ある世界で（『お絵かき禁止の国』）
県立	長崎東高等学校	一年	平瀬 皓	「戦争」とは何か、「平和」とは何か（『同志少女よ、敵を撃て』）
県立	長崎東高等学校	二年	瓦吹優衣	自分の価値は自分で決める（『流浪の月』）
県立	長崎明誠高等学校	二年	野口美凜	弱音が溶ける（『今のわたしになるまで うつと向き合った1年間の記録』）
県立	猶興館高等学校	二年	松永京華	成長するにつれて（『こころの処方箋』）

熊本県	県立	宇土高等学校	一年	武末華	青年期失顔症が暴く私の狡さ（『青春ゲシユタルト崩壊』）
	県立	鹿本高等学校	二年	古川羽純	生きることは考えること（『22世紀の民主主義 選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』）
	国立	熊本高等専門学校 熊本キャンパス	二年	菊池伶央	見方を変えれば（『火花』）
	国立	熊本高等専門学校 熊本キャンパス	二年	永松日月	私が技術でのこすもの（『絶対に面白い化学入門 世界史は化学でできている』）
大分県	県立	大分上野丘高等学校	二年	相良凜	私が私であること、あなたがあなたであること（『友だち幻想 人との（つながり）を考える』）
	県立	大分豊府高等学校	一年	加藤瑠莉	命の物語（『時給三〇〇円の死神』）
	県立	杵築高等学校	三年	得丸くるみ	私の友達ポーターは標高何m？（『友だち幻想 人との（つながり）を考える』）
	県立	杵築高等学校	三年	野原まみ	私の価値（『両手にトカレフ』）
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園高等学校	二年	菊池彩乃	誰かにとつての当たり前（『手のひらの赤ちゃん 超低出生体重児・奈乃羽ちゃんのNICU成長記録』）
	県立	都城泉ヶ丘高等学校	二年	大窪穂乃花	良心とは（『海と毒薬』）
	私立	宮崎学園高等学校	二年	猿山蒼柊	地球市民の一人として出来ること（『ふるさとで呼んでもいいですか 6歳で「移民」になった私の物語』）
	私立	宮崎第一高等学校	二年	榎原稚乃	私が見出す美しさ（『檸檬』）
鹿児島県	国立	鹿児島工業高等専門学校	三年	大田早記	夜明けのつれづれ（『夜明けのすべて』）
	県立	甲南高等学校	二年	三窪真優	私の中のみずぐさん（『金子みずゞ童謡集 わたしと小鳥とすずと』）
	私立	志学館高等部	二年	吉田野々花	星に願いを、あなたに強さを。（『汝、星のごとく』）
	県立	鶴丸高等学校	一年	木下悠太郎	天を相手にせよ（『西郷南洲遺訓 附 手抄言志録及遺文』）
沖縄県	県立	具志川高等学校	三年	高江洲加奈枝	あおときいろ（『あおくんときいろちゃん』）
	県立	向陽高等学校	一年	前富里佳伶	私と言葉をつないだもの（『広辞苑 第七版』）
	県立	向陽高等学校	二年	笈沼美妃	私にとつての存在（『線は、僕を描く』）
	県立	コザ高等学校	二年	源古菜々美	気づくことで広がるカラフルな世界（『カラフル』）

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。（2月上旬予定）
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>